

「命の息を吹き込まれた」

2020年10月09日

神である主は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き込まれた。人はこうして生きる者となった。(創世記2章7節) 神である主は、人に命じられた。「園のどの木からでも取って食べなさい。ただ、善悪の知識の木からは、取って食べてはいけない。取って食べると必ず死ぬことになる。」(創世記2章16節～17節)

創世記2章4節aの「これが天と地が創造された次第である」という言葉をもって、「祭司典」と言われる資料の創造物語は終わっている。これ以降は、紀元前9世紀頃、神をヤハウェと呼ぶ「J典」と言われる資料の創造物語である。「J典」は、天地、宇宙の創造には関心がなく、人間創造と人間の墮落を中心に、また、擬人的な話法で、興味深く描いている。神が天と地を造られた時、雨も降らず、耕す人もいなかった。野の灌木も草もなかった。しかし、水が地下から湧き上がり、土の面を潤していた。神は、「土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き込まれた。人はこうして生きる者となった。」人は二つの要素で造られている。一つは、人は土の塵で造られた。肉体は土の塵で造られたから、死ねば、土の塵に帰っていく。当時は、土葬であったから、この認識は当然と頷ける。もう一つは、鼻に神の命の息を吹き込まれ、そのことによって、人は生きる者となった。息はヘブライ語の「ルアッハ」で、「霊」という言葉と同じである。神は、土の塵で造った人間の鼻穴に神の霊を吹き込んだ時、生きる者となった。霊は交流を可能にする力で、神との霊の交流によって、人間は命を得た。この人間理解は、聖書に一貫している信仰である。ヨハネ福音書20章には、復活した主イエスが弟子たちに、「彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。』」と、聖霊を受け、あなたがたによって、罪の赦しの宣教をなさいと命じておられる。聖霊を受けることが罪の赦しで、その者が真に「生きる者」とされるのである。この福音の原点が、人間創造の初めに書かれ、出発点にしている。

神は、土の塵で造り、命の息を与えて生かした人間(アダム)を、東の方のエデンに園を設け、そこに置かれた。また、食べるに良さそうなあらゆる木を地から生えさせ、園の中央に、命の木と善悪の知識の木を生えさせた。エデンから川が流れ出て園を潤し、そこから分かれて、様々な産物を生み出す四つの川ができた。アダムは、壮大な広がりを持つ豊かな楽園で、生きるように置かれたのである。

神は、「エデンの園に人を連れて来て、そこに住まわせた。そこを耕し、守るためであった。」神は人間に職務を与えている。それは、エデンの園を耕し、食を得て、守るためであった。楽園で安閑として過ごすのではなく、仕事と使命を与えられたのである。

そして神は、「園のどの木からでも取って食べなさい。ただ、善悪の知識の木からは、取って食べてはいけない。取って食べると必ず死ぬことになる」と言われた。園にある木から自由に取って食べて良いとの許可をいただいたが、園の中央にある善悪の知識の木の実だけは、取って食べてはいけないと、唯一の禁止事項を告げられた。この禁止事項の意味は大きい。人は神から創造された者であるから、超えてはならない一線があるということではないか。最終的な善と悪の判断は神が付けられる。裁きの判断は神の御手の中にある。それを犯した時、人は死んでいく。アダムはエデンの園で生き始めたが、そこには、許可と禁止の緊張関係があったということである。